

## 平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会沖縄大会に参加して

ピースあいち研究会 丸 山 豊

2018年9月8日～9日にかけて、ひめゆり平和祈念資料館が主催となり「平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」が沖縄で開催されました。全国から54名の参加があり、日頃の活動の成果と課題を論議しました。この二日間は、主催者の細やかな心遣いと温かさ、レポートの質の高さ、ひめゆりの戦跡フィールドワークなど、その充実した中身に参加者も疲れを忘れ、満足感あふれた大会になりました。ピースあいちからも7人参加し研究実践交流と親睦を深めました。（関空閉鎖のため立命館大学国際平和ミュージアムの山根和代さんが参加できなくなり皆さん大変残念がっていました。）

### 【「文化は平和と結びつく」めんそーれ沖縄】



写真は初日夜の懇親会で披露された沖縄舞踊です。琉球王の前で踊る格式の高い優雅な踊りです。踊り手はひめゆり平和祈念資料館の普天間館長とスタッフ。

沖縄は独立国であり誇り高き文化を受け継いでいることを実感させました。

### 【初日会場：第一高女と女子師範の跡地 栄町市場のひめゆりピースホール】



栄町市場をガイドする仲田さん

沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の二つの学校があった場所が初日会場となった栄町市場です。ここでひめゆり学徒隊が結成され、出発した歴史的なところ。しかし戦後、闇市となり今もその面影を残している場です。寮、テニスコート、プール、農場、何棟かの校舎のあった場所をひめゆりの仲田さんの案内でフィールドワークをしました。ここで学んだ生徒の生き生きとした姿と学徒出陣が重なりました。

【ピースあいちからも報告】



ピースあいちからは坂井さんと赤澤さんが報告しました。坂井さんは沖縄企画展の歩みを発表し、沖縄の方からも高く評価されました。赤澤さんは、次世代継承についての報告です。

11日の沖縄タイムズでも体験者からの「語り継ぎ手の会（リボン）」として紹介されました。（新聞記事参照）

短い時間でしたが端的で分かりやすい報告でした。

【沖縄のメディアは二日間取材し報道した】



全国の平和博物館の関する同館の取り組みを紹介し、関係者が集まり8、9日に開かれた「平和のための博物館・市民ネットワーク」の全国交流会では、戦争体験の継承の形式や考え方について報告があった。9日は、糸満市のひめゆり平和祈念資料館で、体験のない人が戦争を伝える

尾鍋さん（左）は、14年に亡くなった元ひめゆり学徒、宮城喜久子さんの体験を紹介。糸満市の荒崎海岸で、友人らが手りゅう弾のピンを抜いて上くなり、肉片となった体験を語る宮城さんのビデオを流した。喜久子さんたちと宮城喜久子さんが生徒たちに説明する場面を見ながら、その思いを語る尾鍋拓美さん（左）11日、糸満市、ひめゆり平和祈念資料館

### ひめゆりの記憶継承報告

#### 平和博物館交流会 非体験者の模索紹介

「地上戦つてん戦い」が想像できますか？。同館説明員の尾鍋拓美さん（37）が、全国から集まった博物館関係者に問い掛けた。同館では、2015年で元学徒による講話を原則終了し、今は尾鍋さんら戦後世代が講話を担っている。

尾鍋さん（左）は、14年に亡くなった元ひめゆり学徒、宮城喜久子さんの体験を紹介。糸満市の荒崎海岸で、友人らが手りゅう弾のピンを抜いて上くなり、肉片となった体験を語る宮城さんのビデオを流した。喜久子さんたちと宮城喜久子さんが生徒たちに説明する場面を見ながら、その思いを語る尾鍋拓美さん（左）11日、糸満市、ひめゆり平和祈念資料館

つて、また戦争が起きるとは、友達を死を無駄にするぞ」と尾鍋さん。だから「おれ思出すのがつらくても宮城さんたちは体験を語り続けてきたと説明した。自身には戦争体験がない尾鍋さん。「伝えることは難しい」というが、体験者が残してくれた映像や資料を使うことで、自分にも伝えることができると考えている。「二人でも多くの人に伝えることは、戦争をしないことにつながる」

全国の団体も継承に取り組んでいる。「戦争と平和の資料館」ピースあいち（名古屋）は昨年、体験者からの聞き書きや朗読、映像処理・編集を行う「語り継ぎ手の会（リボン）」を発足。尾鍋さんらと尾鍋拓美さん（左）11日、糸満市、ひめゆり平和祈念資料館

#### NHK受信料 全額免除へ

総務省の電通省の諮問機関が苦しむHKKの放送変更に、NHKは全国で約21%の負担を軽減する見込み

#### 家計苦し

総務省の電通省の諮問機関が苦しむHKKの放送変更に、NHKは全国で約21%の負担を軽減する見込み

沖縄タイムズ 2018.9.11

二日間にわたる大会には 11本のレポートが報告されました。私の感想を含めて紹介します。

### 【現代の課題から平和を考える—平和のグローバル連帯】

○立命館大学国際平和ミュージアムの安齋育郎さんからは、INMP（平和のための博物館国際ネットワーク）の近況報告がありました。私は INMP が国連広報局認定の NPO であることを初めて知りました。若い研究者を含めた新体制で日本の平和博物館がリーダーシップをとり、2020 年第 10 回国際平和博物館会議（京都大会）を成功させたいとの強いメッセージが発せられました。

○「女たちの戦争と平和資料館」wam の池田恵理子さんからは「慰安婦」問題解決をめざして広がる国際連帯の試み」と題して、まず日本政府の慰安婦問題の世界的な影響を封殺する圧力を批判しました。しかし # Me Too 運動と連動し国家の犯罪、人権問題としてグローバルな平和連帯が生まれつつあること、また戦時性暴力被害の掘り起こしとして、満蒙開拓団へのソ連兵の性暴力と接待問題の実態研究、現代史の課題ではアルゼンチンの軍事政権下の性暴力の告発、沖縄の反基地闘争と性暴力根絶の運動とのつながりなど、慰安婦・性暴力問題は日本政府の圧力に反比例し国際的な連帯に向かっていることを指摘しました。

#### 《花ばあば》



\*慰安婦をテーマにした絵本『花ばあば』は日本だけ出版が遅れていたが今年やっと出版にこぎつけたそうです。田島征三は「国境を越えて痛みを分かち合うために一日本軍の「慰安婦」にされた花ばあばの物語」「この絵本を一番必要としているのは、ぼくたちであり、若い人たちだと思う。」と帯に書いています。

クオン・ユンドク著 桑畑優香訳  
出版：ころから

○東京「ピースミュージアムいたばし」の浪指さんからは、現代の課題から未来を語る平和の重要性も提起され、「平和とは何か」のワークショップ、ディスカッションには若い人の参加も増えてきたことをあげ、平和博物館の新しい在り方に一石を投じました。

### 【第五福竜丸からビキニ事件へ、ヒバクシャの記憶継承】

○第五福竜丸平和協会の蓮沼さんからは、第五福竜丸からビキニ事件へと研究対象を広げた報告がありました。マーシャルのヒバクシャ、被爆した多くのマグロ漁船の船員、当時、雨水（天水）を常用していた沖縄の放射能雨まで問題関心を広げています。その結果、カザフスタンのセミパラチンスクやアメリカのネバタなど核実験場のヒバクシャ、福島原発までも視野に入れることとなり、アメリカに保存が期待される核関係文書の発掘の必要性が浮かび上がっているとのこと。

○「NPO 法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」（発表は伊藤さん）の報告によると史料、証言、記録の映像化とデジタル化の一連作業（デジタルアーカイブス）は、

多くの学生、若い研究者をひきつけているようです。チーム研究を深め創造的に作品を残す表現活動は、若い人たちによる新しい歴史継承の一つです。

\*若手の研究関心が「アジア太平洋戦争」後に移行している？いずれにせよ、核廃絶に向けた核兵器禁止条約の批准推進につながる運動になるのでしょうか。

### 【被害と加害の両面性の問題】

○中帰連平和記念館の芹沢さんからは「中帰連とは何か、撫順戦犯管理所の日本兵捕虜」について明確な説明がありました。「兵士が加害を自覚した時、初めて平和のために自らを語る」ことを皆さん実感されたと思います。つまり加害と被害は表裏の関係であり、この問題は平和博物館が次世代に語り継ぐときの最も重要なテーマとなります。

\*中帰連平和記念館関係の参加者は8名（海外を含め）と来年度開催の熱意が感じられました。今後中帰連は歴史研究の研究拠点の役割を果たしていくでしょう。

○開館六年目を迎えた満蒙開拓平和記念館は、国策といえども加害性を打ち出しています。寺沢館長は「現地の人々に対する加害」「内なる加害」の両面に向き合う大切さ、事実在即したガイドの重要性を指摘しました。参加者から当記念館の加害の位置付けを積極的に評価する意見も出されました。

\*ひめゆり平和祈念館はどうしても被害、犠牲の面が当然強くなります。しかし戦後生き残った学徒たちの「平和のために語り続け生きぬいた姿」は、私たちに「戦争とは何か」「なぜ起こったのか」を考させるはずです。そこから加害、加担、協力、戦後責任とつながっていくのでしょう。

### 【地域と共に平和を学ぶ各館の取り組み】

○満蒙開拓平和記念館の木村さんからは、ボランティアガイドの歴史研究講座を開催している「ピース Labo」の報告がありました。まず満蒙開拓に関する学習研究会を実施し、毎月ミーティングをもち、通信を発行しているそうです。また「子ども平和学習会」を毎年開催する中、全国高校総合文化祭「2018 信州総文祭」では地元の松川高校生がガイド案内を行うまで地域に密着している様子が報告されました。長野県出身の脚本家、くるみざわしんさんと村民の脚本による、演劇、朗読の活動も紹介されました（テレビでも放映されましたが）。舞台表現は当事者性に違和感を感じさせないだけに世代を超えた継承活動になります。県外から修学旅行で訪れる児童生徒たちに、満蒙開拓記念館で何をどう学ばせるか、次のステップアップを模索しています。

全体として「満蒙の歴史を知ること、そして学ぶ事が戦争の全体像を明確にし、未来の平和を創り出す力になる」との決意が伝わりました。

○山梨平和ミュージアム（YPM）の浅川さんからは、「企画展辺野古基地問題・山梨と沖縄・沖縄戦」の取り組みで、沖縄戦で亡くなった山梨関係者の慰霊塔を一人の山梨県民が私財を投じて現地に建てたという史実が注目を浴びたことから、博物館の柱として地域に根ざした研究の重要性を強調されました。また YPM で発信する情報は、必ず県庁の記者クラブに顔を出し、チラシを一人ずつ配布するなど、日常的に行う意欲と行動力に驚きました。



○ひめゆり平和祈念資料館の普天間館長からは「メモリーウオーク」「教員向け講習会」「フォトランゲージ」「わたしの気持ちシート」「ワークショップ」を積極的に取り入れた事例が報告されました。ここでは議論、グループワーク、体験、活動で主体的に参加し、仲間などと深く考えながら課題を解決する「アウトプット型」のいわゆる学校における授業手法を取り入れています。対象を教員、大学生、児童生徒に絞り、対応する取り組みは相当な労力を必要とします。こうした多面的な取り組みは、今後他の博物館（資料館）に大きな影響を与えることになるでしょう。その基盤は教育、子どもまで含めた幅広い研究にあります。

【栄町市場ひめゆりホールの記事

—ひめゆり平和祈念資料館普天間館長のアクティブラーニング紹介】



# 平和学ぶ取り組み紹介

## 全国交流会 博物館関係者が報告

全国の平和博物館の関係者でつくる「平和のための博物館・市民ネットワーク」の全国交流会が8日、那覇市安里のひめゆりピースホールであった。約40人が参加し、原爆や「慰安婦」、戦犯などさまざまな問題に関する8組の活動報告が行

われた。交流会は毎年1回あり、県内での開催は初めて。9日まで開かれる。被爆者運動の記録を保存し、継承するための拠点設立を目指しているNPO「ノーマア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」（東京）の伊藤和久事務局長も発表。若い世代の人が被爆の実相を知り、被爆者の歩みを受け継ぐことができるようにと進めている「デジタル・アーカイブス（電子図

書館）の構築に向けた取り組みを紹介した。ひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳館長は、受け身ではなく「戦争を自分ごととして考える」ための平和学習の取り組みを報告した。今年8月には大学生が沖縄戦にまつわる場所を回り、映像作品を作る「メモリーウオーク」を初めて実施。教員向けの講習会も開いている。普天間館長は「参加型」や「アウトプット型」、体験やグループでの話し合いなどを通じた「アクティブラーニング型」の学習により、「能動的なことにつながる」と話した。

### 【学んだこと・今後の課題—次世代の継承は歴史認識と当事者性の共有から—】

各館それぞれ「次世代への継承」には様々な取り組みを模索していることがわかりました。その実践にもっとも必要なことは、語り継ぐ側が語り部と歴史認識を共有できるかにあります。今回のひめゆりの尾鍋さんの平和講話からは、宮城喜久子さんの人生、生きた証しをまるごと「歴史化」して初めて人前で語るができる、つまり「当事者性」が生まれている、と感じられました。一方で聴く方の心に響く感性に迫るには、どの部分を五感化（映像、視聴、実物提示）するか、ここが最も難しいところでもあり同時に「歴史認識の深化」が問われるところです。この点をふまえて今後もっと互いの実践交流が望まれます。

原爆の図丸木美術館の岡村学芸員とも話したのですが、悩みは地元の小中学校の来館が減少していること。これには第五福竜丸平和協会の安田学芸員も悩んでいました。学校の自己規制として子どもをなるべく教室外に出したがる傾向に加えて、多忙の中で若い教師の「平和教育」への消極性や歴史修正主義からの学校批判への回避傾向、教科書選定とリンクした教育委員会の中立を装った排除がうかがえます。しかし今回のひめゆり平和祈念資料館館長の普天間レポートは、文科省が推奨するアクティブラーニングを正面にすえ、子どもの思考過程に沿った具体的な試みが示されました。これらは表現活動まで広めた「子どもに開かれた平和博物館」の提言でもあり、私たちはこれらをどう受け入れていくべきかが今後の課題となると思われます。

### オプションツアー【フィールドワーク～ひめゆり学徒隊ゆかりの戦跡をたどる】

行程は丸木美術館の岡村さんのブログ「丸木美術館学芸員日誌」に詳しく掲載されています。岡村さんの言葉には無駄がなく写真も素晴らしくフィールドワークの追体験ができます。多忙な岡村さん、いつ、どこでブログを発信されるのか驚きです。大会2日目の発表も併せてご覧下さい。（URL：<http://fine.ap.teacup.com/maruki-g/> 9月9日の日誌）



伊原第三外科壕から 山城本部壕、サトウキビ畑を抜けて荒崎海岸に出ました。

荒崎海岸から魂魄の塔に向かう時だけスコールに見舞われました。

写真はひめゆり学徒最期の地「荒崎海岸」

## 【ひめゆりのスタッフに送ったメール】

最後にお世話になったひめゆり平和祈念資料館のスタッフの方々へのお礼のメールを転載します。

.....

ひめゆり平和祈念資料館の皆様へ

今回のひめゆりでの交流会、大成功でしたね。細心の心遣いが随所に感じられ「沖縄に行って良かった」と実感しています。ありがとうございました。

第一高女、女子師範の跡地で開幕され、栄町フィールド案内で戦前のイメージを想像し、先輩の方々の見えない絆を改めて考える事もできました。また懇親会では普天間新館長の気さくな面と踊りの優雅さも思い出に残ります。

翌日は北アイルランド、アンネフランク、アムステルダム国際展示に今回お世話下さったスタッフの姿をパネルで見つけ、平和運動の国際化へ熱意を感じました。また見やすい展示で紹介されており、まさに「ひめゆりから HIMEYURI へ」。

また午前の「ひめゆりスタッフの平和講話」は、胸に迫るものがあり、確実に受け継がれています。やはり勉強し、自らの問題意識を高め発信していこうとする最も基盤となる部分がないとできないことです。

スクール後の蒸し暑さのフィールドでしたが、「現地立つこと」は歴史の空気を肌で学び直すことだと確信しました。ひめゆりの展示、講話が自分の心に落ちてくる実感を味わい、これは若者の歴史感性を呼び戻すだろうと羨ましくさえありました。

初日の普天間館長のレポートからも、子どもたちが主体的に学ぶ取り組み、子どもたちの率直な感じ方、表現を引き出すワークシート、そればかりか教師を巻き込んでいく積極的な取り組みは、私たちが目指すところです。

館長はじめスタッフの皆様の沖縄の暑さを超える温かい心遣い、感動を頂きました。

今大会のクオリティの高さに満足しています。

みなさんありがとうございました。

(2018.9.10)

.....